

『正統の哲学・異端の思想〜人権・平等・民主の禍毒〜』

◆著者——中川八洋
◆発行所——徳間書店
◆定価——一、九〇〇円(税別)



ISBN978-4-19-860619-0

わが国の保守論壇の鬼才、中川八洋氏（筑波大学名誉教授）が1996年に著した力作である。当時サヨクから保守に転向して日が浅かった評者は、たしか新聞広告で本書を見かけてすぐ初版を購入し、以後現在でも時々読み返している。この手の書物の中でも最大級の影響を受けた気がする。

本書は、今日わが国でアプリアオリに善きものと信じられている「理性」「平等」「進歩」が、全体主義の温床としていかに人類に禍毒をもたらすかを明らかにし、

それらを防疫し「自由」を守る砦としての保守主義の重要性を説く。

著者が本書を執筆した直接の動機はソ連の崩壊だ。人類史上最大の災厄であり、全体主義の最悪型である共産主義は、1991年のソ連崩壊でその虚妄が暴かれた。しかし、これをもって自由社会が「冷戦の勝者」として驕慢し、みずからが立脚すべき「正統の哲学」への回帰を疎かにするなら、いつの日かまた全体主義が甦って人類に襲いかかるに違いない、その危機感が著者を駆り立てた。すなわち、

共産主義が崩壊しても、デカルト的「理性」主義とルソー的「平等」主義とスペンサー的「進歩」主義への狂信がある限り、そしてそれがデモクラシーと結合する限り、人類は自由の破壊者である全体主義と無縁ではいられない。著者は、ロシア革命はフランス革命の二番煎じであり、フランス革命の負の遺産であるデモクラシーこそが全体主義の母胎として二十世紀に暗黒の抑圧と戦争をもたらしたと喝破する。その上でフランス革命とその精神的支柱であるルソーに唾棄するのである。

本書では、17世紀以降の思想家・哲学者・政治家を、「理性」「平等」「進歩」信仰を生み出した危険で有害な思想家と、「自由」を守るため戦った健全で有益な哲学者とに分類している。デカルト、ルソー、ヘーゲル、マルクスといった有名どころは、ほとんど前者であり、後者にはバーク、トクヴィル、チェスタトンらがいる。

結局のところ我々は、これら「異端の思想」と「正統の哲学」とを峻別し、前者を排し後者を保守する不断の努力を続けていくしかない。しかしこの作業は困難を極める。真の邪悪は常に天使の仮面を被ってやってくるからである。

格調高いタイトルとはうらはらに、著者の筆致は激越で、ときに漫画的といえるほど過激だ。それゆえに、評者のように、政治思想に興味はあるが原典に当たるほどの根性のない初心者には読みやすく、有難かった。（広報部部員 満岡 渉）